

令和4年度熊野古道協働会議・第3回分科会 発言要旨 (R4.12.23)

※案内等表記のルールづくりのグループは2回目の開催

*事務局において、意見交換での発言要旨を検討ポイントごとにまとめました。「○印」は参加者からの意見、「●印」はその意見をふまえた意見交換・質疑応答のまとめです。

第1部 (Aグループ) 持続可能な保全体制づくり (10時~12時)

【熊野古道サポーターズクラブ】

- 県担当者に伝えたが、活動のビデオを記録しておき、それをプロモーション資料として、企業・団体への人的・財政的な協力依頼に活用してはどうかと思う。
- 新たな参加者を募るために、活動報告をホームページに掲載するだけでなく、よりアピールする方策を考えていただきたい。
- 遠方からの参加者もあり、仲良く熱心に取り組んでもらえた。サポーターズクラブの仕組みがうまく機能していると思う。多くの方が写真を撮る登り口や滑りやすい場所などを清掃していただき、安全面の配慮の必要性を改めて感じた。
- だんだんの会はいつも土曜日に活動している。曜日の設定は難しいところだが、日曜日は神社の神事とバッティングする参加者が多く、来年度以降は配慮いただきたい。
- ボランティアを受け入れる際に保全団体をサポートする世話人の組織化を考えていかないといけない。
- 今後サポーターズクラブを保全団体の活動日に合わせて平日に実施する計画があり、期待している。
- 総じて今年のサポーターズクラブは、今後の方向性を探る意味から良いチャレンジだったと思う。

【保全活動の望ましいスタンダード】

- 以前、土が流れてしまい歩きにくいところの道普請を行ったが、外から土を運んできたとか、加工した木材を使って階段をつくったとか、「過剰保全」という指摘や批判を受けた。
- そうした指摘をしている人は文化財調査委員で、その人たちに相談がなかったことにショックを受けていたのが実情。

市町が間に入って、保全活動の情報を文化財調査委員などの関係者に共有していただき広く意見を聞くとよいのではないかと。

- 全ての保全作業を関係者と情報共有することにはならないと思うので、線引きをしていきたい。

- 落ち葉をきれいに掃除した方がよいのか、残しておくほうがよいのかなどを含め、保全をどこまですべきか、やり方も含めて標準化しないといけないと感じた。
- 松本峠の石畳は大変美しいが、石畳を登ると木の根の道が続く。本来は木の根っこは出てきていなかったと思われ、土が入っていたのではないかと。時代に合った補修方法が必要。
- 三重県世界遺産保全推進協議会で保全マニュアルを作成しており、そのマニュアルに沿って作業していただければよいと思う。今後、保全団体の方に送付するとともに、ホームページに公開する。
- 世界遺産が対象だが、それ以外についても、マニュアルと同じ方法で保全すれば十分だと思う。
やるべきことと、やってはいけないことを規定おり、作業方法についてQAを用意している。保全のレベルは規定していない。
- 保全活動の望ましいスタンダードについて、マニュアルを見たうえで再度議論が必要かと思う。

- 世界遺産登録エリアを中心に議論が進められているが、登録されていないエリアや登録されていても保全が行き届いていないエリアの保全についても、来年度の課題として議論してほしい。
- 保全会員の中には語り部などの活用者がもっと積極的に保全活動に参加すべきとの意見があり、保全と活用の連動は重要である。今後の周年事業に向けて、また世界遺産への追加登録に向けても、課題になってくると思う。

【工程表（案）】

- 企業のCSR活動も以前は実施していた。コロナ禍で止まってしまったが、工程表に記載のとおり、企業・団体に協力を依頼していくよう事務局に願います。
- 保全活動について、ごみ拾いのように簡単な作業から、石畳道の補修のような負担の大きい作業まで幅広い。補修方法を動画で示すことも考えたい。

- サポーターズクラブの法人会員への人的・財政的支援の依頼や、企業版ふるさと納税を活用した支援を働きかけたい。
- 来年度は現在のスキームで企業・団体へ協力を依頼することになる。保全を統括する組織の立ち上げは早くて再来年度以降を想定しており、将来的には統括組織の機能とすべきと考えている。
- 統括組織は、伊勢路「全体」の保全を統括する組織として位置付けるべきだと思う。伊勢路全体の視点から、未登録エリアや行き届いていないエリアも含め、組織の機能や必要なリソースを、来年度は具体的にご議論いただければよいと思う。

【公的な財政支援】

- 資料に基づき、各市町から情報の共有がされました。
- せっかく財政的支援を一覧にまとめてもらったので、今後もこの一覧を活用してほしい。
- 東紀州地域振興公社の補助制度の趣旨は、熊野古道の遺産を管理する市町を保全団体のボランティアが支えているなか、ボランティアでは賄えない資材購入費等の特別な支出を補助する制度であり、通常のボランティア活動以上のことを補助するという事は想定していない。
- サポーターズクラブを受け入れる前の下見のガソリン代もできれば出してほしい。そのためにも、これまで寄付してくれた企業以外からの財源を確保する必要がある。

【まとめ】

- 行政による補助金の情報を共有でき、サポーターズクラブの新たな取組について確認できた。また、保全のレベル・スタンダードの問題が提起され、議論が始まったこともこの分科会の成果と言える。
- この分科会を欠席している市町が多い。多くの市町に参加いただけるように事務局から要請をお願いしたい。

第2部 (Bグループ) 案内等表記のルールづくり (13時~15時)

【検討ポイント】

(P9) ターゲットとめざす姿について

- 意見なし

【検討ポイント】

(P12) 対象とする案内看板について・案内看板の類型ごとのルール化する項目について

- 英語表記はあるに越したことはないが、一から作るには大変だし、字も小さくなる。多言語標記はすべてQRコードに任せるという考え方もあるのではないか。
- 英語表記は、日本語に併記する形で案内看板に入れる。
今回のガイドラインは、新設や更新を機に、案内看板を整備するときの考え方を統一するもの。さしあたっての対応としては、P11の女鬼峠の看板のように、英語表記だけ後付けするような方法もある。
- 英語表記は小さめになってしまうので、経年劣化で文字が読みにくくなるのではないか。
- 経年劣化は避けられないが、長持ちさせるために文字を彫り込む方法もある。また、英語表記の文字高さも、日本語の4分の3を確保する。
- 材質について、支柱にはアルミを提案したい。少なくとも根本は腐らないように木製以外にしてもらいたい。
- 材質は、世界遺産としての価値をどう維持するのかというポイントにつながる。アルミは当時にはなかった素材なので、使うとなると世界遺産の真正性としての評価は落ちてしまう。そのため、議論の余地はなく採用できない。
ただし、根本の劣化を防ぐことは重要なことなので、根本部分の補強にアルミを用いるなど提案の方法をとれる可能性はあるが、工事が必要になるのでしかるべき協議が必要。
- 案内看板の設置場所について、設置者によって濃淡があるので、ガイドラインで整理してはどうか。
- 峠と峠の間の道は、本来のルートを特定できるか・できないか、ルートが一つだけか・複数あるか、歴史的な側面を重視しているか・ほかの点を重視してい

るか、などによって、地域差が出ている可能性もある。

- 設置場所にはいろんな考え方があるが、安全に歩いてもらうという視点が一番重要。
- 山中の道迷いは事故につながりかねないので、分岐点に看板を設置することは大事。熊野古道以外のルートと重なっているエリアには、熊野古道ではないことを示す看板があると親切。
- 今回のガイドラインでは、伊勢路全域が対象なので、事務局においては、できるだけカバーする方向で検討してもらいたい。
- 追加登録の動きも考えれば、世界遺産登録の有無に限らず、伊勢路を踏破してもらうために案内看板は必要。

【検討ポイント】

(P18) 道標 必須事項と必要に応じて記載する事項の仕分けについて

- 必須事項が多いと、表示スペースの問題が出てくるだろうし、表示板が増えれば費用もかさむだろうし、簡素にする方向性は大事にしてもらいたい。
- 標高を表示してはという意見があったが、峠の登り口は標高表示がよいのか、津波防災の観点からは海拔表示がよいのか。
- それぞれの違いを確認して検討する。いずれにしても、必要に応じて記載する事項として追加する。

【検討ポイント】

(P19) 起終点は、上のパターンのほかにも「伊勢と熊野」「伊勢と新宮」を使っている実例や「NorthとSouth」「IseとHayatama・Hongu」等を使うことも考えられるがどうか。

- 「NorthとSouth」は特に伊勢エリアで混乱が起きそう。
- 4km道標では「伊勢と新宮」なので、参考にしてはどうか。
- 起終点は、「伊勢と新宮（本宮）／IseとShingu(Hongu)」を案として、地域の人にも意見を伺うこととする。
- 起終点と立寄り地点の表記は必須事項でよいか。両方載せると看板の表示面も大きくしたり、2枚用意する必要がでてくるがどうか。
- 両方とも必須事項として提案しているが、P17の立て看板（簡易版）のお

り、起終点は標記の簡略化（伊勢神宮→Ise、熊野速玉大社→Shingu（熊野本宮大社→Hongu））して、表示面1枚に収める形も想定している。

【検討ポイント】

（P19）史跡、施設等の選定については、右記ガイドマップ（*）に掲載されているものを基本として、設置者が検討することとしてはどうか。

- 表記の統一にあたって、馬越「峠」なのか、馬越「峠道」なのか、媒体によって、ブレがあるので考え方を整理してはどうか。
- 検討する必要がある。

【検討ポイント】

（P20）「伊勢路」の認知度を高めるブランディングの観点から、「熊野古道」ではなく、「熊野古道伊勢路」の表記を基本とすることも考えられるがどうか。

- 伊勢路の表記は入れた方がよい。

【検討ポイント】

（P21）記名看板 必須事項と必要に応じて記載する事項の仕分けについて

- P22の峠上の地点番号を示す立て看板は100m道標を指しているのか。
- 6月の分科会で、世界遺産登録外の峠にも100m道標を取り入れてはどうかという意見があったため、ガイドラインに反映したものの。

【検討ポイント】

（P25）ガイドラインの検討状況を和歌山県・奈良県にも情報共有してはどうか。

- 意見なし

【検討ポイント】

（P26）案内看板の視認性向上・劣化防止の観点から、柱頭に色付き木製板を設置する方法を取り入れてはどうか。

- 濃茶色だと目立たない。
- 色付き天板のアイデアは実現してもらいたい。

- 赤白目印のデザインをオフィシャルなものとして使ってもよいか。
- 赤白目印のデザインについて、和歌山・奈良がどのような印象を持つかはわからないが、来訪者に伊勢路ならではのマークだと気づいてもらえたら、おもてなしにもなる。
赤白目印にしたのは、ほどよく目立たせるためで、大きさも工夫している。
赤白目印は世界遺産登録エリアでは使えないという認識。
- 世界遺産エリアの立木や石に、赤白目印を付けることはできないが、道標になら付けられる可能性はある。伊勢路全域で赤白目印をつなげられるので、検討してみる価値はある。

- 熊野古道協働会議で、赤白目印に提案があって関係者で了解が得られたときに、いくつか条件があったと聞いている。その経緯は確認しておいた方がよいのではないか。
- 事務局において確認する。
- 世界遺産エリアの道標の天板に、赤白の色付けをすることは、視認性向上・劣化防止の工夫としてあり得る。

【検討ポイント】

(P26) 地域製品の活用促進の観点から、案内看板の素材は、地元産木材（ヒノキ・スギ）の使用を推奨することとしてはどうか。

(再掲)

- 材質について、支柱にはアルミを提案したい。少なくとも根本は腐らないように木製以外にしてもらいたい。
- 材質は、世界遺産としての価値をどう維持するのかというポイントにつながる。アルミは当時にはなかった素材なので、使うとなると世界遺産の真正性としての評価は落ちてしまう。そのため、議論の余地はなく採用できない。
ただし、根本の劣化を防ぐことは重要なことなので、根本部分の補強にアルミを用いるなど提案の方法をとれる可能性はあるが、工事が必要になるのでしかるべき協議が必要。

【まとめ】

- 本日、意見を伝えることができなかった方は、事務局の南部地域活性化局まで連絡していただきたい。概要については、参加できなかった主要メンバーにも情報共有する。